

## 絵について

梅津 昌彦

私達はいつごろから絵を描くようになったのだろうか？

そして何を描こうとしてきたのだろうか？

私達が学んできたのはバラバラだが、アルタミラ洞窟の牛の絵は紀元前かなり昔の様だし、中国の黄河のほとりの岩窟仏像画はそれに比べれば仏様がモチーフだから新しいのだろう。

ナイル川上流の人物像群はその中間とも思われる。

それ以降の画像や大彫刻の歴史ははっきりしたものがないように思う。

ヨーロッパではルネッサンス、東洋では宋や漢の時代を待たなければならないのだろうと思われる。

中東では人物画を禁ずる回教の影響で美術は幾何学的模様の図案に限られた。

それにしても、絵のモチーフは釈迦とその弟子達、マリアとキリストなど、同じ宗教的人物画でも、画材が東西全く別々に発達したのは面白い。

欧州では色々の色彩の岩石粉を油で溶いたが、東洋では植物からの色素も使いそれを水で溶いて描いた。

この流れは現在も続いているように思われる。

その後宗教的色彩の薄い人物画へと進み、風景画などは一切見られないのも東西の共通項である。

19世紀となると、イギリスやフランスなど進んだ西洋諸国では、立派な家の中では壁という壁や階段にも人物画が飾られるようになった。

日本では寺院の時代となり、大きなふすま絵の風景画や静物画となる。

東西の美的表現対象の違いはいよいよはっきりする。

京都のお寺や料亭で大きな油絵を飾るのは見たことがない。

私としては、日本の邸宅には、油絵よりも水彩画が似合うと思っている。

15号 30号くらいの水彩画がもっと一般家庭で飾られてし  
かるべきだと思うが、これは私個人の一方的趣味の問題であ  
ろうか？

70 歳で社会人生活を終え、絵を描きたいと思うようになりました。

カルチャーセンターの『やさしい水彩画』コースを選び、今では日本一の水彩画家とも言われる永山裕子氏について主に静物画を 10 年間描き続けました。

「もっと透明水彩を楽しもう 永山裕子」より



Camogli(イタリア カモーリ)57×44 cm

『みえたように描くのではなく、こうみたいと思って描く。』

以上